

認知症の高齢者役に声をかける中学生1123日、八戸市



## 八戸・南浜中で模擬訓練 地元施設、八学短大など連携

2025年の認知症の高齢者は政府の推計で全国で471万人。八戸市は第9期市高齢者福祉計画によると1万4257人とされ、高齢者全体の2割に上る。

24年に認知症関連で警察に届け出があった行方不明者は、警察庁によると全国で1万8121人。青森県内では64人。関係者によると、市内でも介護施設から高齢者が外出したまま行方が分からなくなる事例があったという。

今回の講座は、同市の白銀南・鮫・南浜地区高齢者支援センター瑞光園が主催し、八戸学院大短期大学部介護福祉学科や近隣の介護サービス事業所などの協力のもとで実施した。

同センター管理者の内澤菜美輝さんは「声がけの難しさや地域の大人に頼る選択肢を知ってもらえたはず。市内全域で実践を踏まえた模擬訓練が広まってほしい」と話していた。

# 声がけ中学生も協力

## 認知症徘徊の行方不明防ごう

高齢化の進展などに伴い、今後も増加が見込まれる認知症。その疑いがある人を含め、徘徊などによって行方不明になる事案が全国各地で相次いでおり、家族だけでなく、地域での見守りの重要性が年々増している。こうした現状や対応を正しく知ってもら

おうと、次世代を担う中学生が参加した認知症サポーター養成講座が23日、八戸市立南浜中で行われた。全校生徒が高齢者を相手にしたさまざまなケースを体験しながら、声のかけ方や寄り添う姿勢など万が一の場合のサポートの仕方を学んだ。（松渡拓）

この日は「認知症徘徊SOS模擬訓練」と銘打ち、同市の公益財団法人「こころすこやか財団」代表理事の松倉典子さんによる講義や、同介護福祉学科の学生による「K A I G O きらめき隊☆けつばレンジャー」の寸劇によって認知症の基礎的知識を深めた。

実際の訓練では「帰る道を忘れてしまった人」や「ATMの操作が分からなくなった人」などさまざまなケースを想定。生徒はグループごとに分かれ、困っている高齢者役の人に優しく声をかけたり、家族や警察に連絡したり、保護につながる対応を実践した。